

昭和女子大学 内部質保証推進本部外部評価委員会 報告書

日時：2024年7月31日（水）14:50～16:20

場所：昭和女子大学 学園本部館3階中会議室

出席者：【学内】

坂東眞理子総長、金尾朗学長、吉田昌志副学長、小川睦美副学長、
井原奉明内部質保証推進本部本部長（副学長）、
石垣理子内部質保証推進本部委員、清水史子内部質保証推進本部委員、
緩利誠内部質保証推進本部委員、須永哲矢内部質保証推進本部委員、
吉田奈央子内部質保証推進本部委員、山内浩内部質保証推進本部委員、
中島さやか内部質保証推進本部委員、井口寛佳内部質保証推進本部委員、
石川雄太内部質保証推進本部委員、中村公香内部質保証推進本部委員

【学外】（五十音順、役職名は委員会開催時点）

朝比奈豊 株式会社毎日新聞社 名誉顧問

岩本康 世田谷区 副区長

木川眞 ヤマトホールディングス株式会社 参与

茂呂眞理子 株式会社日能研本部 常務取締役

渡辺修 石油資源開発株式会社 取締役特別顧問

開会に先立ち、坂東総長から開会の挨拶があり、18歳人口が毎年減少する中で、近年では、専門職大学院の設置や、日本語教育センター開設および新たな留学プログラムの開始を行い、また今後も国際学部の改組や、情報系学部の新設などを予定しており、本日は、そのような本学の取り組みを評価いただき、アドバイスやご指導いただきたいとの発言があった。

続いて、井原内部質保証推進本部長から外部評価委員会の趣旨説明、学内の出席者および外部評価委員の紹介があった。その後、「2023年度自己点検・評価報告書」の中から、主なトピックス3点を紹介した後、それぞれの取り組みについて説明を行い、外部評価委員から評価・提言をいただいた。

報告（1）2023年度主なトピックス（緩利内部質保証推進本部委員）

①グローバル教育（自己点検・評価報告書：第4章）

[説明]

本学の学生を海外へ送り出すだけでなく、外国人留学生教育の充実と内なる国際化を目指し、「日本語教育センター」を2024年4月に設立し、また、海外の優秀な生徒を直接受け入れるプログラム「Showa Direct4.5」もスタートさせた。また、2022年度より継続している「タンザニアさくら女子中学校」支援プロジェクトの活動についても日本経済新聞など様々なメディアに取り上げていただいた。

②社会人教育/高大連携（自己点検・評価報告書：第4章、第5章、第9章）

[説明]

社会人のリスキリングを支援すべく、2023年度より、専門職大学院 福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻（男女共学）を開設した。また、社会人研究員の方が所属する現代ビジネス研究所では、研究員同士の交流・ピアサポートを目的とした「Special Interest Group」を開設したほか、ダイバーシティ推進機構では継続して、社会人向けのキャリアカレッジを運営し、様々な企業・社会人の方々にご参加いただいた。

また、2023年度に開始した高校生向けの取り組みとして、協定校の生徒を対象に、本学の海外キャンパス「昭和ボストン」での2週間の留学機会を提供する「高校生ボストンプログラム」を開始したほか、本学の附属校および協定校の生徒を対象に、科目等履修生として受け入れる制度を開始した。このように協定校を中心に、様々な形で高大連携を強化させた。

③プロジェクト型学修/キャリア教育（自己点検・評価報告書：第4章）

[説明]

かねてより本学の教育の柱として力を入れているプロジェクト型学修については、2023年度も、多くの自治体・企業等と連携しプロジェクトを展開させていただいた。学生が主体となって、社会とつながり、課題を解決しながら成長する「生きた学び」を提供するよう注力した。

また、グローバル教育やキャリア教育を本学の教育の柱として推進してきた結果として、卒業生の実就職率は全国の女子大学でトップクラス（2022年度卒業生は第3位、2023年度卒業生は第1位）を維持している。今後も引き続き、一人ひとりの学生のキャリア実現のため

めの支援を推進していきたい。

報告（２）グローバル教育について

（清水内部質保証推進本部委員／自己点検・評価報告書：第４章）

・「日本語教育センター」の開設

[説明]

本学学生を海外留学へ送り出すのみならず、外国人留学生の教育の充実と内なる国際化を目指し、2024年4月に日本語教育センターを開設した。

・「Showa Direct4.5」の開始

[説明]

ベトナムの高等学校や日本語学校で学ぶ優秀な生徒を対象にした4.5年間で学位取得を目指す留学生向けプログラム「Showa Direct4.5」を開始した。本プログラムでは10月（後期）に入学し、半年間アカデミック日本語を学んだ後、翌4月から新入生とともに学科の正規課程を履修する。2年次後期～3年次前期に、専門性の理解をさらに深めるための関連業界でのインターンシップを実施するほか、日本人学生との共修授業など多彩な学習機会を設け、日本企業で働けるだけの専門知識の修得を目指す。受入れ学科は会計ファイナンス学科、健康デザイン学科、食安全マネジメント学科で、2024年10月に、健康デザイン学科に3名入学予定である。

・「タンザニアさくら女子中学校」支援プロジェクト

[説明]

「タンザニアさくら女子中学校」支援プロジェクトは、タンザニアにある、日本の市民教育によって設立された「さくら女子中学校」を通じ、タンザニアの女子教育を支援することを目的とした2022年から継続しているプロジェクト活動である。このプロジェクト活動を通じて、参加学生らは、途上国における女子のエンパワメントの重要性を経験的に学び、また、連携先企業やNGO等の社会人との協働することで、目標達成のためのマネジメント力を修得している。

[外部評価委員から]

外部評価委員から、優秀な外国人留学生を日本に受け入れるうえで「日本語の壁」は高く存在するため、「日本語教育センター」の取り組みは非常に重要であるとの評価があった。また、留学生との英語でのコミュニケーション体制や、日本語教育センターにおける学生以外（外国人労働者等）の受入れの展望について、質問があった。

報告（3）社会人教育について

（須永内部質保証推進本部委員／自己点検・評価報告書：第4章）

・専門職大学院 福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻の開設

[説明]

実務経験のある社会人を対象とした、専門職大学院 福祉社会・経営研究科 福祉共創マネジメント専攻を 2023 年度に開設した。募集対象は、保育・福祉・介護・医療に携わる方や、企業や行政において消費関係実務を担う方、また「マスター消費生活アドバイザー」取得希望の方などである。

・専門職大学院の特長

[説明]

本専攻は、社会人が学びやすいよう、平日夜間や土曜開講を中心とし、ほとんどの授業を対面とオンラインの併用としたうえで、最短 1 年間で修士号を取得できるカリキュラムである。履修する科目数に応じた単位従量制の学費納入となっており、学生のプランに応じて履修計画を組みやすくしている。また、修士論文以外にも課題研究報告書での修士取得も可能であることも特長である。

・教育課程連携協議会

[説明]

専門職大学院設置基準第3章第6条の2に基づき、教育課程連携協議会を設置し、年2回審議している。第1回協議会(2023年9月22日実施)においては、学生のニーズおよび産業界から求められる人材像を擦り合わせたうえで、教育課程・カリキュラムの妥当性を検討した。第2回協議会(2024年3月14日実施)においては、初年度の振り返り、および関連する産業界に対する本大学院の認知度向上に向けた取り組みについて検討を行った。

[外部評価委員から]

外部評価委員から、「マスター消費生活アドバイザー」の職務内容や、本専攻への志願者の特性について質問があった。

報告（４）プロジェクト型学修について

（石川内部質保証推進本部委員／自己点検・評価報告書：第４章）

・社会連携・社会貢献推進の体制

[説明]

本学における社会連携・社会貢献は、現代ビジネス研究所、コミュニティサービスラーニングセンター、各学科等を中心に推進されている。現代ビジネス研究所では、主にプロジェクト活動やシンポジウムを通じて、コミュニティサービスラーニングセンターではボランティア活動を通じて、各学科や教員においては、ゼミナール・授業でのプロジェクト活動等を通じて社会連携・社会貢献の取り組みを行っている。

・プロジェクト事例紹介

[説明]

「昭和女子大学×ブラックラムズ東京パートナーシッププロジェクト」は、世田谷区に拠点を置くラグビーチーム「リコーブラックラムズ東京」と協働し、ラグビーを通じて世田谷区の地域活性化を目指すプロジェクトであり、20名の学生が参加している。また、「世田谷地域交流ラボ「まちづくり」プロジェクト」は、世田谷区と協働し、「世田谷地域交流ラボ」を通じて地域課題の解決に取り組むプロジェクトであり、5名の学生が参加している。本学では、プロジェクト型学修を通じて、学生達が、主体的に目標を設定し、目標に向かって多角的に考えやり遂げる力、協業先との連携を通じた企画力・プレゼンテーション力・コミュニケーション力等を身に付けることを期待している。

[外部評価委員から]

外部評価委員から、中等教育においてもプロジェクト型学修が発展している状況下において、高等教育におけるプロジェクト型学修の意義・目標をどこに定めるかについて質問があり、海外大学との連携を活かし、中等教育との差別化を図るとよいのではという助言があった。また、世田谷区の地域活性に取り組むプロジェクトに関連して、地域の方々から本学

に対する見方の変化についてや、世田谷区以外の地方の自治体や大学との連携の展望について質問があった。

○講評（まとめ）

・渡辺外部評価委員

大変ボリュームのある 2023 年度自己点検・評価報告書の中から重点項目についてご説明いただき、昭和女子大学の取り組みについて、よく理解することができた。

18 歳人口の減少を受け、留学生の受入れ等の取り組みを行っていることを高く評価する一方で、昭和女子大学の大きな特長は米国ボストンにある「昭和ボストン」であると考え。昭和ボストンを活用した様々な留学プログラムが用意されており、海外へ留学することが日常化していることは昭和女子大学の資産であり、今後も引き続き充実させていただくことを期待する。

また、日本の文化や観光を学び、日本のインバウンド産業や地方振興を担うことができる人材を養成する「国際日本学科」が、2025 年度より設置されることも高く評価したい。今後益々、東アジアの一体化が加速する中で、昭和女子大学で学んだ学生が日本国内のみならず、海外で就職、活躍する学生が増えることを期待したい。

・朝比奈外部評価委員

本日は各分野のトピックスをお聞きでき、昭和女子大学の取り組みを理解することができた。事前に、昭和女子大学のホームページを拝見し、上海交通大学に留学しダブル・ディグリー取得を目指す学生の記事を読んだ。その中で高いレベルの HSK（中国語検定）を取得していること、また英語も駆使しながら世界各国の学生と交流したり、現地の文化を学んだりしていることに驚き、積極的に海外で学ぶ姿を頼もしく感じた。女子大学の存在意義が議論される昨今であるが、先日のパリ五輪の開会式において、多くの女性によるパフォーマンスを見るにつけても、「女子」のよりパワフルな活躍が必然的に求められている時代なのではないかと感じた。

改組関係では、2026 年度に情報系学部の設置を計画していることは、本格的な理系学部の学びを展開する点において評価したい。また、2025 年度開設の国際日本学科では、観光学に留まらず、日本文化を深く理解し発信することのできる人材を養成していただきたいと期待する。

・木川外部評価委員

2023 年度の自己点検・評価報告書を読み、昭和女子大学が積み重ねてきた努力が結実していると感じた。グローバル教育やプロジェクト型学修等が、教育理念として存在するだけでなく、形として現れていることを、まずは高く評価したい。

また、国内外において、社会のリーダーとして活躍する女性の割合が、今後益々増えていくことが自明である今日において、女子大学はどのような役割を担うのか考えたい。例えば、米国の名門女子大学「Seven Sisters」のように、昭和女子大学がユニークな存在意義を維持しながら成長を続けていくために、共学を含めた様々な他大学との単位互換制度を、学部レベルでも進めることを検討してはどうかと考える。

・岩本外部評価委員

2022 年度自己点検・評価報告書では、問題点として、各部署の自己点検・評価結果を大学として把握しきれていない点を挙げていた。その点、2023 年度自己点検・評価報告書を確認すると、内部質保証推進本部による PDCA サイクルを機能させる取り組みとして、チェックリストの整備や公開を行ったこと、また、定期的な自己点検・評価の実施においては、各部署との意見交換を実施し、計画的に自己点検・評価を行った等の記載があり、内部質保証推進本部が中心となって自己点検・評価を全学的に検証する体制が充実したことが確認された。

また、学生支援においては、修学支援、生活支援、キャリア支援の 3 本柱で取り組まれているが、特にキャリア支援について感想を述べたい。近年、世田谷区職員においても、若い世代の離職が多くなっている。自分の価値観やキャリアを重視する若い世代が増えている中で、大学における就職支援、キャリア支援の在り方も変わっていくべきであろうと感じている。単なるカリキュラムの一つとして、教育効果を測るのみではなく、長期的なスパンで自身のキャリアにどのように活かしていけるのかを考えられるような学びを期待したい。

・茂呂外部評価委員

本日のお話と併せて、事前に確認した資料等も含め感想を述べたい。まず、学生アンケートを確認すると、約半数の学生が昭和女子大学を第一志望としていたという点は、貴学の優位性であると考えられる。現在、高大連携が進んだことも影響し、中等教育において大学選びの際に「この先生のゼミで学びたいからこの大学に行きたい」といった、大学名ではなく、研

究重視で大学を選択する傾向が強まっている。その傾向を考慮すると、昭和女子大学にしかない学びを増やし、広報していくことが重要であると考え。

また、私学女子中学校の約半数以上において、英語入試を取り入れている。例えば、英検2-3級を持っている受験生には加点が与えられるといった内容であり、今後、共学や男子中学校においても、英語入試の拡大傾向は強まっていくことが想定される。そして、英語を得意とする生徒らは中等教育時代に、英検1級レベルを取得することも全く珍しくない。そういった生徒らは進学先として、国内大学ではなく海外大学を志向する傾向にある。グローバル教育を柱とする昭和女子大学には、是非、国内にしながらグローバル感覚を身に付けることができる点を強く打ち出し、英語を使いながら国際社会の中で活躍する意識の高い学生の受け皿となることを期待したい。

また中等教育の先生方から、「女子は数学・理系科目が苦手である」という世間のイメージがまだ根強くあるが、実際には、学ぶ機会に恵まれなかっただけであり、本来は男女関係なく、数理を志向する学生はいるのだという声が聞かれる。昭和女子大学では全学科学生対象の「データサイエンス副専攻プログラム」を提供しているほか、2026年度に情報系学部の設置を計画している。是非、「女子は数理が苦手である」というイメージを、全学をあげて払拭しながら、データサイエンスや理系学部の展開を進めてほしい。また、データサイエンス科目については、共学大学を含めた他大学でも多く展開されているので、他大学との連携等も進めていくことで、先述のイメージを払拭する効果があるのではと考える。

以上の講評の後、金尾学長から外部評価委員からの評価、提言に対する謝辞と、頂いた提言事項に是非取り組んでいきたいとの発言があり、閉会となった。

以上